

住民総参加の福祉のまちづくりへ向けて
地域グループの役割

**老人クラブが
できること**

超高齢社会に向けて、老人クラブには大きな活躍が期待されますが、メンバー自身が超高齢化してリーダー候補もいないといった悩みをよく耳にするようになりました。その一方で、要援護者等を仲間に入れることには戸惑いがあるという事実がありますが、年を取れば人間は当然、要援護になります。

超高齢社会を迎えるにあたり、国全体で「助け合い」が推進されている今、当事者の組織とも言える老人クラブに最も求められているのも、その「助け合い」の精神だと思います。要援護になったら退会しなければならないというのではなく、認知症で社会から受け入れられなくても、老人クラブだけは味方になるぞ、というぐらいの意気込みが期待されます。そのため、本冊子のメインテーマも「助け合い」になっています。

<目次>

1.あなたの活動対象は「気になる仲間」の姿をしてやって来る

- (1)老人クラブ特有の「気になる仲間・気になる状況」／1
- (2)気になる仲間への対応方法／4
- (3)気になる仲間の問題に対応するために「ネットワーク型グループ」／6

2.要援護になってもお楽しみを続けられる老人クラブに

- (1)要援護になったらクラブを去れ？／7
- (2)「やめたい」という人の引き留め策／8
- (3)他の活動への移行のすすめ／8
- (4)デイサービス等を利用するようになっても参加し続ける法／9
- (5)要援護でも活動し続けるための課題と対策／9
- (6)会員登録だけしている人に参加してもらうために／10
- (7)施設入所者なども参加できるように／10
- (8)要援護の仲間を支える／11
- (9)地区体制を生かす／12
- (10)会員以外の気になる人への関わり／12
- (11)認知症の人を支える／13

3.高齢者の庇護者としての老人クラブの役割／14

1.あなたの活動対象は「気になる仲間」の姿をしてやって来る

(1)老人クラブの「気になる仲間・気になる状況」

老人クラブのメンバーで「気になる人」（気にかけたり、関わりが必要な人）とは、どんな人でしょうか。以下のような仲間を、他のメンバーが「気になる人」と見ているか、まずそこがポイントになります。

- ①病弱・要介護になって来なくなった仲間
- ②退会した仲間
- ③デイサービスを利用して、活動に来なくなった仲間
- ④施設に入所した仲間
- ⑤活動についていけなくなったと、来なくなった仲間
- ⑥もう高齢だからと来なくなった仲間
- ⑦仲間に迷惑をかける人、変わっている人
- ⑧個人的に家庭内、職場内に問題を抱えている人

(2) 「気になる仲間」への対応方法

ではその「気になる仲間」に、どう対応したらいいのでしょうか。

これらのヒントを見ながら、自分のクラブでどう対応しているか、またはこれからどう対応できるか、考えてみましょう。

<気になる仲間>	<どう対応したら？>
①病弱・要介護になって来なくなった	介助人をつけて参加できるようにする
②技術的に活動についていけなくなった	上達した人が指導する
③耳が遠くなった	「通訳」をつけて参加できるようにする
④カラオケが歌えなくなった	「おしゃべりだけでもいいから」と誘う
⑤体力的についていけなくなった	「来るだけでいいから」と誘う
⑥全く歩けなくなった	押しかけ型活動を (メンバーがその人の家に行って活動)

⑦最近来なくなった	→	
-----------	---	--

⑧退会した	→	
-------	---	--

⑨老人ホームに入所して 来なくなった	→	
-----------------------	---	--

⑩デイサービスを利用し始め て来なくなった	→	
--------------------------	---	--

	→	
--	---	--

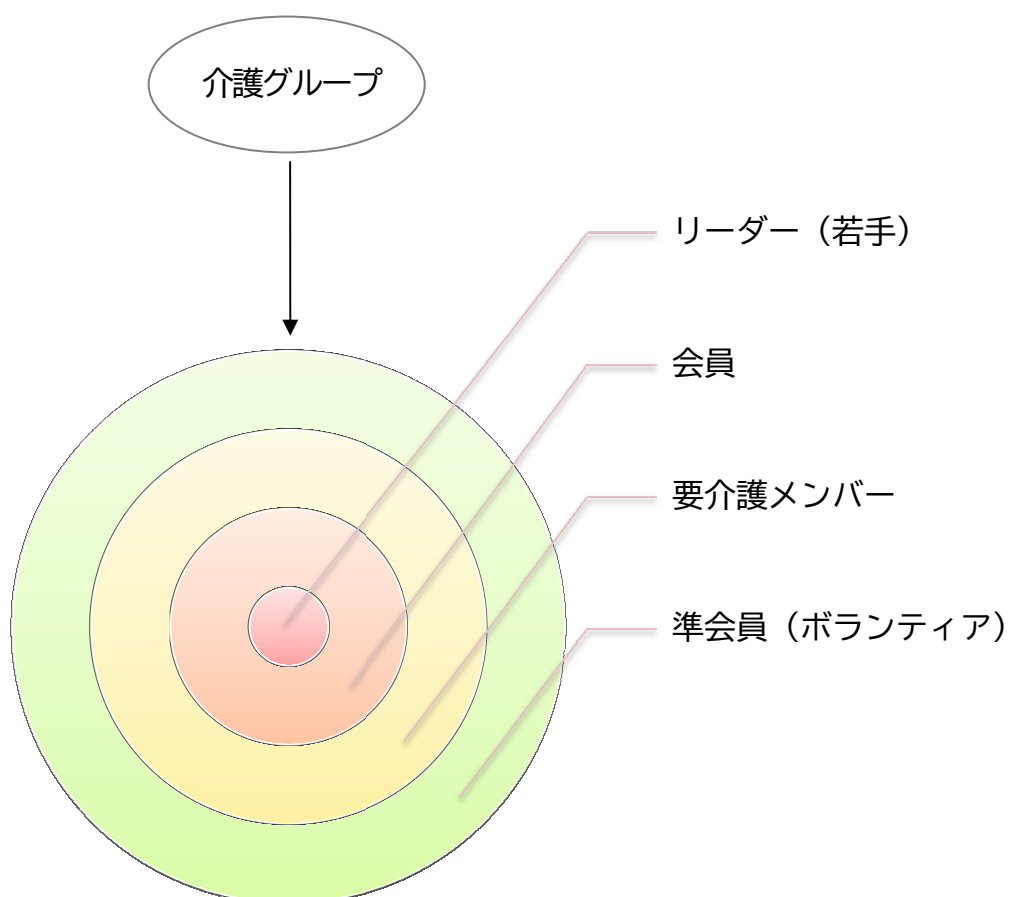
	→	
--	---	--

(3)気になる仲間の問題に対応するために 「ネットワーク型グループ」

「気になる仲間」に対応しようとしても、例えば要介護の仲間だったら、その方面の技術が必要です。ポイントは、老人クラブ自体が要援護者の集まりであるということなのですが、では、どう対応したらいいのか。

今は、老人クラブとしての対応能力が不足しているから要介護の仲間を受け入れていないとすれば、介護資源を仲間に取り込むか、介護グループとネットワークすればいいということになります。それだけでなく、ボランティア的な会員も取り込み、その代わり要援護の会員も受け入れるのです。

そうすると、クラブの組織自体がいくつかの層のようになります。



2.要援護になってもお楽しみを続けられる老人クラブに

要援護になった人が「体が弱ったので活動をやめたい」あるいは「クラブをやめたい」という声をそのまま受け入れていたら、老人クラブは段々メンバーがいなくなってしまう。そういう人を引き留め、できるだけ長く一緒に仲間として活動を続けられるようにする工夫を考える必要があります。そういうクラブに育てていくことで、いま元気な人もまた、安心してクラブに所属できるはずです。

(1)要援護になったらクラブを去れ？

私たちは「要介護」といった言葉に過剰に反応する傾向があります。本人は自分が何もできなくなったなどとは思っていないのに、要介護度がつくと、周りが「あの人はもうだめだ」と思い込んでしまうのです。すると、本人も遠慮して参加を諦めるようになります。

本人はどう思っているのかを確認しながら、むしろこちら側は「要介護になっても、参加できないことはない」という考えで、本人を説得していくべきなのです。

そこで考えるべきことは—

- ①要援護になっても参加し続けられるよう支援
- ②会員登録だけしている人を活動の仲間に
- ③要援護の仲間では支え合い

岐阜県中津川市のある地区に、豪華な設備を備えたマレットゴルフ場があります。一般のゴルフ場にひけを取らない立派なものです。そうするとどうことが起きたか。足腰の悪い人も、こぞって参加していました。普通は「足腰が悪いから行けない」と言うところですが、こちらは、同じ症状でも「リハビリになるから行っている」という言い方になるのです。最近ではコンペかなにかで、認知症の人が続けて2人も優勝しました。他の参加者が、彼らに教を請おうとも言っていました。

参加の環境条件によって、参加したい気持ちが遠慮や諦めの心を上回れば、こんなにも変わってくるものなのです。

(2)「やめたい」という人の引き留め策

ある老人クラブでは、「やめたい」と言う人を簡単に見送るのではなく、たとえばカラオケグループの人が「声が出なくなった」と言えば、「おしゃべりに来るだけでもいいではないか」と説得している人がいました。

自分のクラブでやめたいと言う人それぞれについて、以下の表を使い、引き留め策（参加を続けられるようにする方法）を考えてみましょう。

名前	参加している活動	やめたい理由	引き留め策

(3)他の活動への移行のすすめ

「ゲートボールは体がしんどいので、もうできない」という人に、「ならばフラダンスはどうか」と別の活動を提案している老人クラブメンバーもいました。できることは、何かあるものなのです。

名前	参加している活動	参加できない理由	すすめたい活動

(4) デイサービス等を利用するようになっても参加し続ける法

デイサービスを利用するようになったから老人クラブへ行かれなくなったというケースがよくありますが、デイサービスへ行くのは大抵、1週間のうちのほんの1日か2日で、参加は可能なのです。ケアマネジャー等と話し合えば、日にちを調整するなど、できることはいろいろあります。

名前	デイサービス等の 利用状況	クラブへの 参加状況	参加条件	対策

(5) 要援護でも活動し続けるための課題と対策

要援護状態になっても活動し続けられるようにするための方法を、ケース別に考えておくといいでしょう。

課題	今の対策	その評価	考えられる案
本人がもう諦めている	続けられる方法を提案する	本人の意志が固い	一度、お誘い上手のメンバーが活動現場に連れ出す

(6)会員登録だけしている人に参加してもらうために

登録だけして、活動はしていない理由がいろいろあるはずなので、それを探るのが先決です。その上で、活動へ一歩踏み出してもらう必要があります。そうでないと、いずれ退会していくでしょう。

名前	活動できない理由	対応策
〇〇さん	やりたい活動がない	本人が個人的にやっている趣味活動などを探り、老人クラブで一緒に楽しめないか。

(7)施設入所者なども参加できるように

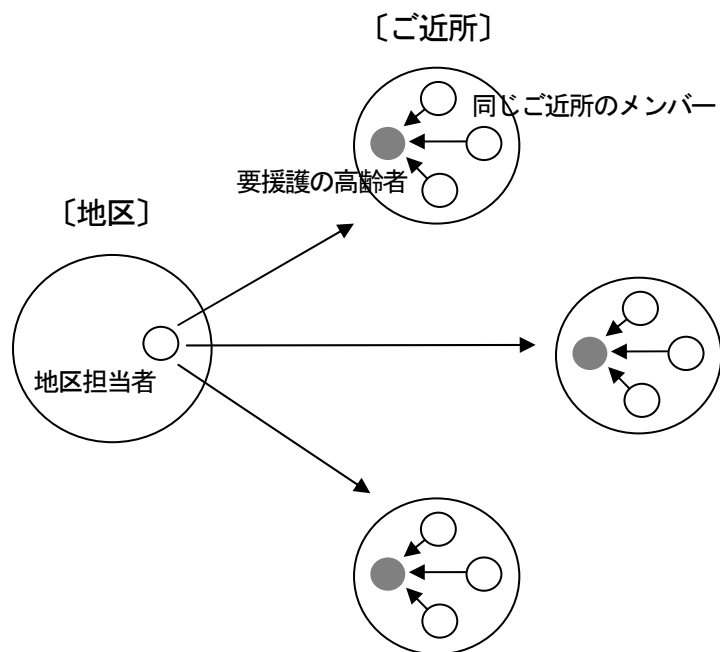
施設に入所した人は、もう地域とは関係がなくなると思われがちですが、ただ居を施設に移しただけと考えればいいのです。まだ活動が可能な人もいるし、むしろ施設に入所したからこそ、地域の仲間とふれあいたいという思いもあります。入所以前に参加していた活動を再開できるように、移送も含めて関係者と協議し、支援する必要があります。

名前	参加していた活動	現在の参加の意志	参加できる方法は？
〇〇さん	グランドゴルフ	もうプレイするのは無理と思っている	要介護でもできる方法を工夫する

(8)要援護の仲間を支える

今は、老人クラブとは「元気な高齢者の会」と思っている人が多く、要援護の人に関わることには戸惑いがあるようです。しかし大介護時代になれば、ただ元気な高齢者だけで集まって楽しむというのではなく、超高齢社会の主役である高齢者自身が互いに助け合える組織であることが求められます。たとえば、足元の要援護の仲間を、会員であろうがなかろうが皆で支えていくということもできるのです。

要援護の仲間	状況	関わっている人と関わりの内容	課題	対応策
〇〇さん	1人暮らしで、ちょっと認知が出てきた	単位クラブの数名が様子を見て	もっと濃密な見守りが必要になってきた	地域の見守りネットワークの人たちと協議する



(9)地区体制を生かす

地区担当者がいて、要援護のメンバー1人ひとりに対し、ご近所のメンバーが関わるといふ仕組みにしているところもあります。

〇〇地区で 気になる人	気になる状況	現在の関わりの内容	対応策

(10)会員以外の気になる人への関わり

最近では、友愛活動の対象をメンバーに限らず、他の人も見守りの対象にするケースも出てきています。実際に友愛活動をしている人の動きを観察していると、特に世話焼きさんのような人は、相手がメンバーかどうかに関係なく見守っていました。

気になる人	気になる状況	関わっている人とその 内容	対応策

(11)認知症の人を支える

認知症の人の場合、見守りを点から線、線から面へと、広げていく必要があります。しかも、いつ何が起きるかわからないということがあります。緻密な見守りネットを作る必要があるのです。それと、本人が誰を見込んでいるか、よく顔を出すのはどこかも調べておきます。

認知症の人	会員・非会員	現在の状況	関わっている人と その内容	対応策

3.高齢者の庇護者としての老人クラブの役割

老人クラブのリーダーセミナーの席で、私が認知症の話を出したところ、突然参加者の1人が、周りに聞こえるようにこう言いました。「人間、ボケたらおしまいだね」。私はこれを捉えて、あえて厳しく、皆さんにこう申し上げました。「老人クラブの人が、そういうことを言っちゃあおしまいですよ」。

認知症の高齢者は、周囲の人たちから敬遠され、孤立しています。それなのに、同じ高齢者の仲間であり、認知症も身近な問題として考えられるはずの老人クラブからもそのように扱われたら、彼らは立つ瀬がありません。老人クラブなら、その人を庇護する役目が果たせるはずです。むしろ、「人間、ボケて何が悪い？」と言いついて返していただきたいのです。

①要介護になっても社会が受け入れることを求める運動

今は要介護になると、地域グループは仲間に受け入れない。特に施設に入所したり、デイサービスを利用する場合だ。これを変えさせていく。

②要介護になっても社会で役に立てるようにする運動

要介護の人ほど、誰かの役に立ちたいと願っている人はいない。寝たきりの人が、大学の介護研修のモデルに立候補した。そして、その時の写真が遺影として使われた。「人に役に立っている」姿で、本人も誇りにしていたからだ。

③超高齢になっても「卒業」させない社会づくり

「もう90歳になったからクラブは卒業します」と言えば、クラブも納得してしまう。これを認めたら、何でも「卒業」になってしまう。

④高齢者の問題を考える主役は高齢者であることを宣言

老人クラブがそうであるように、高齢者の問題は高齢者自身が考える。高齢者福祉のあり方も私達が検討する、と宣言しよう。

住民流福祉総合研究所
木原孝久

〒350-0451

埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷 1 4 7 6 - 1

TEL049-294-8284

kiharas@msh.biglobe.ne.jp

<http://juminryu.web.fc2.com/>
